

概要			シマフクロウを支える「海～川～森」にある多様な環境要素を大きな繋がり（広い視野）の中で捉え直し、自分の方法で文脈化体系化し、地域特性を「地域を支える基本構造」として捉え直すことで、地域への理解を深め、問題解決能力や生きる力を育む。総合学習を軸にした各教科との関連づけを意識しながら、地域特性を生かした問題解決や街づくりの提案へと発展させていく。地域の問題や課題を構造的に捉える科学的かつ論理的な思考を身に付けることで、具体的で説得力のある提案を作り上げる力を養う。自分たちの提案を実現するために生かせそうな地域の産業や生産物を見つけ出し、それらに新たな価値づけを行い新たな地域ブランドの創出につなげる。地域で生きることへの展望を持つ。
全体のねらい			・相手（他者・シマフクロウ）の立場に立つことで自分では気づくことができなかった問題や課題を発見する。（課題の設定） ・実際にシマフクロウが生息する環境に触れる、観察する。（新たな繋がりへの発見。情報の収集） ・生息地の観察や地元住民からの聞き取り等によって得た情報を整理して地域特性や問題の構造を浮き彫りにする。学習によって得た個々の情報や知識を大きな繋がりの中に位置付け体系的に捉え直す。（情報の整理・分析） ・地域特性（全体を支える構造）を生かした問題解決方法を考え提案する。問題解決型から価値創造型（商品開発やブランド化）への発想転換（まとめ・表現） ・地域の価値・可能性を発見し、地域へ主体的に働きかける（生きる力）地域の担い手となる自覚。問題解決型から価値創造型への発想転換を促し、創造的でポジティブな生き方を学ぶ。地域で生きる意味を自ら見出す。
	時期	単位	ねらい
1	4月	教室（2）	『生きものとお話しよう！』～シマフクロウと一緒に地域のお宝探しをしよう！ ①生き物を観察する上で「体のつくり」「くらし」「すみか」の繋がりを良く知ることによって生き物の視点で環境を見る方法を身に付ける。 ②生き物（他者）の視点から物を見ることで、他者を支える繋がりがや文脈があることに気づく。 ③他者の視点を組み入れることでより広い世界を理解できることを知る。 ④多角的多面的に地域やものを見る方法があることに気づかせる。⑤様々な要素をバラバラに捉えるのではなく、様々なものと関連付けながら考える方法を身に付ける。 ※探究的な見方や考え方（新学習指導要領 総合的な学習 目標） ◎毎回の授業の中で、生徒が思い付いたお宝があったらその都度発表してもらうことで、自分で見つけよう考え出そうという意欲を持続させる。
2	5月	教室（1） 野外（1）	『浜中町を覆うありがたいの繋がりをシマフクロウの生態を通して学ぶ』 ①シマフクロウの「体のつくり」「くらし」「すみか」の関係を考えながら、シマフクロウがどのような場所でのどのような生きものを獲っているのか。餌となる生きものはどのような環境を必要としているのか。町の中に多様な環境が連続してあることが重要であることに気づく。 『学校も生きものの道の中にある！』 ①身近な生きものが何処から来たのか考える。 ②植物の種子を運ぶ生き物の移動。 ③花の受粉に必要な虫の移動など。 ④地域の生き物の道はどうなっているのか、何処まで繋がっているのか知りたいと思う。
3	6月	野外（2）	『シマフクロウを支えるありがたいの繋がりを探しに行こう！』その1 ①シマフクロウの目になって環境を見直す。 ②シマフクロウの道が繋がっているのか評価する。 ③観察に行った場所にシマフクロウの生存を支えるありがたいのつながりは有るのか？問題や課題を考える。話し合う。 ※問題状況の中から課題を発見し設定する（新学習指導要領 各学校において定める内容：探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力）
4	6月	教室（1） 教室（1）	『シマフクロウの繋がりの今と昔』『昔の浜中町の話聞く。』 ①シマフクロウが生息する森に行き子ども達が感じたり気付いたりしたことを出し合う。シマフクロウを支えるありがたいの繋がりをイメージマップにして共有する。森が持っている課題や問題を考える。②昔の町の環境について話を聞いてイメージマップに手を加える。③昔あって今は無いありがたいの繋がりの要素を見つけ、問題や課題として抽出する。④かつては、町全体を覆う水系をベースにしてシマフクロウが町の各所で見られたことを知る。そのことを町全体にありがたいの繋がりを広げるための潜在的な可能性として捉える。 ①シマフクロウを支えるありがたいの繋がりをイメージマップにして表現する。 ②森が抱えている問題を繋がりの中から抽出する。 ③森・川・海を結ぶ生き物の道や物質循環の大切さを知る。 ④浜中町の土地の豊かさは、シマフクロウを支える大きな繋がりによって支えられていることを知る。 ⑤その大きな繋がりの中に自分たちも含まれていることに気づく。 ※地域の人ものことの中から問いを見出し、その解決に向けて仮説を立てたり調査して得た情報をもとに考えたりする力を身に付けるとともに考えたことを根拠を明らかにしてまとめ・表現する力を身に付ける（新学習指導要領）
5	9月	野外（1）	『シマフクロウを支えるありがたいの繋がりを探しに行こう！』その2

		2)		サケやカラフトマスが遡上する時期に合わせてシマフクロウが生息する森に行って、海と森の繋がりの重要性を実感する。カラフトマスなど魚類を支えるありがとうの繋がりを考える。海の豊かさが森の豊かさに関係すること、逆に森の栄養分が川を通して海に供給され海の豊かさを支えていることに遡上してきた魚の観察をとして感じ取る。浜中町の海の環境や問題について考える契機とする。「シマフクロウが生息している川と森」、「シマフクロウが時々来るようになった川と森」、「シマフクロウが生息できそうもない川と森」、それぞれの場所を観察して、環境の違いを理解する。酪農地帯を流れる川沿いにもかつては河畔林があり、サケやマスが遡上しシマフクロウも見られたことを知る。	①海と森との繋がりがシマフクロウを支える重要な要素であることを知る。 ②カラフトマスなど魚類の生態を学習し、海から森までの連続した環境の重要性を理解する。 ③森・川・海を結ぶ生き物の道や物質循環の大切さを知る。 ④浜中町の土地の豊かさは、シマフクロウを支える海と森の大きな繋がりによって支えられていることを知る。 ⑤その大きな繋がりの中に自分たち暮らしも含まれていることに気づく。自分の存在を問題の中に位置付ける。 ⑥どのような取り組みが必要か具体的なイメージを掴む。 ※地域の人もこのことから問いを見出し、その解決に向けて仮説を立てたり調査して得た情報をもとに考えたりする力を身に付けるとともに考えたことを根拠を明らかにしてまとめ・表現する力を身に付ける(新学習指導要領 各学校において定める目標)
6	9月	教室(2)	『これまでの学習の振り返り』	これまでの学習を通して気付いたことを話し合い、シマフクロウを支えるありがとうの繋がりを表したイメージマップに手を加える。出来上がったイメージマップを見ながら問題や課題を抽出し、シマフクロウと共に生きていく上で必要なことについて話し合う。町全体を覆う複数の水系ネットワークを、水系図を見ながら確認する。前回の野外学習で行ったそれぞれの観察場所を水系図の中に落として大きな系の中で、観察して得た情報を捉え直す。 酪農地帯を流れる川の周りに河畔林を再生することで、町全体にシマフクロウのありがとうの繋がりを取り戻していくことができると知る。	①これまで学習してきた要素を文脈化して捉え直す。 ②バラバラに見えていた環境要素や問題や課題を結びつけて考える方法を学び、体系化する思考を身につける。 ③広い視野で問題を捉える。地域の環境を作る基本的な構造(水系)を理解し、地域全体の環境を改善する方法を考える。 ④地域の成り立ちを構造的に理解して、問題解決に向けて地域に潜在する可能性に気づく。 ⑤問題解決に必要な具体的な取り組みをイメージし共有する。
7	10月	教室(2)		水系図をベースに地域特性を理解し、シマフクロウを支えるありがとうのつながりを街全体に広げていく方法を話し合う。地域のお宝はありがとうの繋がりの中から生まれてくること。ありがとうのつながりを増やし街全体を覆うことができれば、持続可能な真の豊かさが得られることを理解して未来のビジョンを描く。具体的に、河畔林を酪農地帯に再生する方法や協力者の集め方などを話し合い、町全体にありがとうのつながりを増やす方法を考える。	①ありがとうの繋がりにから生まれる本当に良いもの(お宝)を増やすことで問題を解決できるという発想を得る。 ②ありがとうの繋がりを町全体に広げるベースとなる基本構造(水系)があることを理解する。 ③地域や日が持つ潜在的可能性に目を向けポジティブな姿勢で問題解決に取り組む姿勢を育む。(問題解決型から価値創造型への発想転換) ③地域にあるものや産業や人や組織を、シマフクロウのありがとうの繋がりの中で掘り起こし捉え直す(付加価値の創出、ブランド化など)④地域の環境を支える基本的な構造や構成要素、関係性を理解し、科学的な視点で論理的に提案をまとめる力を養う。
8	11月	教室と野外(4)	『シマフクロウも人も喜ぶ街づくりを提案しよう!』	シマフクロウを支えるありがとうのつながりを浜中町全体に広げる可能性や方法、ありがとうのつながりを増やすための具体的な方法(お宝)を自分たちの言葉や表現で伝える。 ありがとうのつながりの繋がりを取り戻し増やすことで生まれる地域の新たな可能性や価値を、特産物など、モノやコトを通して伝える。これまでの学習を通して感じたこと思ったこと、自分の中で起きた変化など、発見したことを基に、自分たちが描く町の未来を発表する。提案を実現させるための第一歩として、酪農地帯を流れる川沿に植樹を行う。	①本当に良いもの(ありがとうのつながり)を増やす具体的な物や方法を考え伝える。 ②学びを通して自らが気づいた地域の価値や特色を自分の方法で伝える。地域ブランドづくりなどの提案。 ③発信力(自分の考えや思いを人に伝えたい)・生きる力(地域で生きる自信)を養う。④地域全体を考え全体の価値を上げる発想や思考を身に付ける ※(新学習指導要領 各学校において定める目標) 地域の人もこのことについての探求的な学習に主体的・協働的に取り組むと共に互いの良さを生かしながら持続可能な社会を実現するための行動の仕方を考え自ら社会に参画しようとする態度を育てる。

『展望』

地域に根ざした探求的な学習をととして地元の良さや特色(基本的な構造)に気づき、それらを新たな文脈(シマフクロウという広い視野)で結びつけ関係付ける。地域のモノやコトに新たな価値(付加価値)を生み出す方法を学んだことで、生徒達が地域の良さや特性をよく理解することで、それらを積極的に生かし自らの生き方(将来像・キャリア)を浜中町の未来の中に描けるように育成する。 地域全体を視野に入れ、問題や課題を大きな文脈の中で構造的に捉え直し、様々な要素と関連づけ、科学的かつ論理的に思考を組み立てることができる人、地域資源を生かした持続可能な地域づくりの担い手を育てる。	総合的な学習の時間 第一の目標 探求的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、より良く課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次の通り育成することを目指す。 ①探求的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識および技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探求的な学習の良さを理解するようにする。 ②実社会や実生活の中から問いを見出し、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。 ③探求的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いの良さを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。
--	---